

ブックレビュー

● 溶鋳炉 (HOCHÖFEN) ●

Bernd und Hilla Becher 著

1992 年リプロポート社発行

A4 変型判, 223 頁, 定価 (税込) 10,300 円

我々高炉技術者にとって驚威の写真集である。ヨーロッパとアメリカに実在した又は実在している高炉の群れをドイツ人ベッヒャー夫妻が 1960 年代から克明に撮影した。日本版の解説者多木浩二氏によるとこれは「溶鋳炉のアルケオロジー」であるという。ベッヒャー夫妻の文章を紹介する。「本書にある溶鋳炉のうちでもっとも古いものは 1860 年代につくられたものである。(中略) 溶鋳炉は一目でそれと判る姿をしており鉄鋼所や製鉄工場地帯のシンボルとなっている。(中略) 溶鋳炉のそれぞれの部分は剥き出しのままである。解剖学的に言えば溶鋳炉は皮膚のない人体のようなものである。」我々技術者は内部の反応を追いかけて過ぎたのかもしれない。いや我々だけではない。鉄の歴史に現れる我々の諸先輩の関心事は溶鋳炉の内部であった。今回視点を変えて「外から」溶鋳炉を見る機会にめぐまれた。私の個人的な感慨を記すことをお許し願いたい。1951 年大学卒川崎製鉄に入社し千葉第一高炉の建設に従事し 1962 年高炉の重油吹き込み技術の導入のため国内各社の諸先輩の中の若輩の一人として初めてヨーロッパの地を踏み二ヶ月間この写真集にある高炉を見学しヨーロッパの文化の偉大さに触れた。再びその当時の光景を見せて頂けるとは。「溶鋳炉の機能と構造」としてベッヒャー夫妻のドイツ語の解説の日本語訳の一部に技術的な誤りがあるが気にはならない。さらに「Dank」としてドイツ語の「謝辞」の中にティッセン社の Dr. Ing Karl Heinz Peters の名前を発見しなつかしい

(川崎炉材(株) 岡部侠児)

● 編集後記 ●

梅雨時には珍しい台風 3 号が通りすぎたすがすがしい朝に、この編集後記の執筆依頼が飛び込んできました。和文会誌分科会の末席に加わり約 9 ヶ月、編集業務の多彩さに多少の戸惑いを覚えています。

さて、本月号には、解説 3 件・技術資料 1 件・論文 12 件を掲載致しました。本誌の内容が、2 年位前より徐々に変化している事にお気づきの事と思いますが、来年度から A4 判化され、更に大きな飛躍が期待されています。

企業その他の組織体が永久に繁栄していくためには、時として、その組織体が有する“パラダイム”の変革が必要とされています。

パラダイム転換の第一歩は、既存の価値体系の創造的破壊より始まるようであり、誌面の刷新はまさにこれに相当するものでありましょう。表紙デザインの新・投稿規定の見直し・レイアウト変更等により型の上での変革は着々と準備されつつあります。

90 年代の先端技術の特徴は、ナノメーターへの挑戦・FMS (多品種少量生産)・先端技術の融合にあるとされています。「鉄と鋼」に寄せられる内容を見たとき、

ナノメーターへの挑戦は、基礎物性の解明とその制御等の面でかなりの進展が認められ、他分野技術の取込み(融合とは別?)にも多大な努力が払われている印象を受ける。

問題は FMS (多品種少量生産)への取組みにあります。鉄鋼業は代表的な装置産業であり、数百億の設備を使用し、同一品種の多量生産は得意であるが、FMS への取組みは遅れているのではないのでしょうか。

高品質・低コスト・短納期等が実現可能な FMS プロセスが開発されてこそ、日本鉄鋼業の次なるページが開かれるものと期待します。

創造的破壊により刷新される「鉄と鋼」誌に、真の意味で新しい息ぶきを吹き込みうるのは、会員各位の試行錯誤的な新しい実践ではないでしょうか。

幸い、今朝のニュースによれば、台風 3 号の被害は殆どないようであり、会員の皆様の「鉄と鋼」パラダイムの変革運動に少しでも寄与したいと思っています。

(Y. O.)